

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：35405

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18288

研究課題名(和文)第二言語学習環境が他の外国語学習に与える影響メカニズムの解明と介入法の開発

研究課題名(英文) Effects of a second language learning environment on the learning of further foreign languages and development of an intervention

研究代表者

関谷 弘毅 (Sekitani, Koki)

広島女学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：60759843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国で学ぶ日本語母語話者が、中国語(第二言語)及び英語(外国語)に対して持つ学習ピリーフ、学習ストラテジーの変化を量的、質的な観点から縦断的に調査し、日々中国語に接することにより形成されると予想される好ましい学習ピリーフ、学習ストラテジーを英語学習に転移させる介入法を提案することを目指した。分析の結果、中国語を第二言語環境の中で使用・学習することによって形成される学習ピリーフが、中国語に対する学習ストラテジーの使用を通して英語に対する学習ストラテジーの使用に転移することが示唆された。また、半構造化面接とチーム基盤型学習形式の指導を融合した指導が効果的な介入法であることを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第二言語環境の中でその言語を使用・学習することによって形成される学習ピリーフが、学習ストラテジーの使用を通して、外国語として学ぶ他の言語に対する学習ストラテジーの使用に転移することが示唆された。この結果は、例えば英語の習得を目指す日本語母語話者にとって、英語圏以外の地域での滞在経験であっても英語の習得を促すことを意味する。学習ストラテジーが転移することを踏まえると、事実上英語が世界の共通語と使用されている中、非英語圏に滞在することは長期的にはその現地語習得にも英語習得にも効果的になりうるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study compared Japanese learners' beliefs and learning strategies regarding Chinese as a second language (CSL) learning with those regarding English as a foreign language (EFL) learning, and attempted to identify the factors that determined the learning strategies used in foreign language learning. The results suggest that, although the learning of high school students based on the Japanese curriculum in a non-English speaking country shows stronger beliefs and more frequent use of strategies for EFL learning, living experience in the country and formation of beliefs based on such experience would work as a transfer to the use of strategies for EFL learning.

研究分野：英語教育学

キーワード：日本人学校 英語学習 中国語学習 学習ピリーフ 学習ストラテジー 転移 第二言語環境 外国語環境

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

### 1. 研究開始当初の背景

生活上の必要に迫られて新たな言語を学ぶ「第二言語」の習得と、日常的には使用されていない環境で新たな言語を学ぶ「外国語」の習得を区別して扱うことの必要性が指摘されてきた (Brown, 2007)。第二言語学習者は、外国語学習者と比べて効果的な学習ストラテジーをより頻繁に使用し、その効果に対してもより強い学習ピリーフを持つことが報告されている (Adel, S.M.R. et al., 2015; Kamalizad, J. et al., 2016)。しかし、これらの研究に参加した第二言語環境にある学習者は運用能力がすでに高いため、運用能力を高める中で好ましい学習ピリーフや学習ストラテジーを形成したのか、第二言語環境そのものがそれらを形成したのかは明らかではなかった。

関谷 (2013) は、以上の問題点を踏まえ、上海日本人学校の高校生を対象に学習ピリーフを日本一般の高校生と比較した唯一の研究であった。模擬試験などの結果から上海日本人学校の高校生の英語運用能力は一般の高校生とほぼ同等であった。比較の結果、1年次において文法を重視する学習ピリーフは日本の一般の高校生の方が高い傾向が示された。日本人学校の高校生にとって英語は外国語であり、授業は日本の高校と同じカリキュラムで実施されているが、生活環境はほとんどの生徒にとって初学の中国語環境である。多くの生徒が文法的な理解を伴わずにサバイバルレベルの中国語を日常で使用しており、中国語の文法的重要性に対する意識が高まらなると考えられた。そしてそれが外国語である英語学習にも転移した可能性が示唆された。

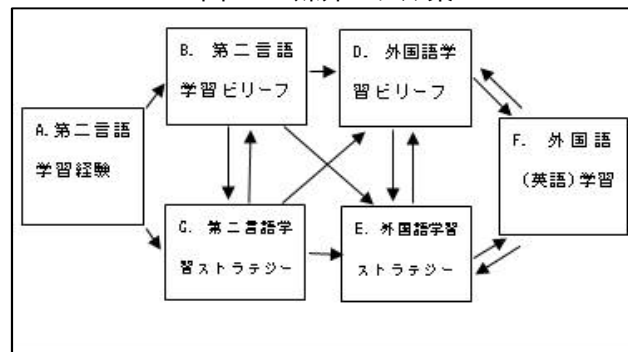
以上を踏まえ、2016年の夏に上海日本人学校高等部において、現職の英語教員とともに、寸劇づくりなどの活動を英語以外の言語を一切禁止して授業を行ったうえで、学校外での日常的な中国語の使用が英語の学習にどう役立っているのかを自由記述で尋ねた。主に恐れずに内容を伝えようとする態度に対するピリーフの転移が示唆された。一方で、上海日本人学校高等部を卒業後帰国して日本の大学に通う協力者に半構造化面接を行った。その結果、一時は低くなっていた文法的重要性に対する意識の再認識の傾向が見られた。

今後は、量的分析だけでなく質的分析も、横断的な分析だけでなく縦断的な分析も用いて知見を積み重ね、第二言語学習の経験が他の外国語学習に与える影響のメカニズムを包括的にとらえる必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

上記の背景とこれまでの研究成果を踏まえ、本研究ではまず、第二言語学習 (中国語) の経験によって形成される学習ピリーフ、学習ストラテジーが他の外国語学習 (英語) に与える影響メカニズムの解明を目的とした。これは、図1の媒介モデルにおける矢印の有無と強弱を探ることを意味する。

図1. 媒介モデル案



すなわち、B から D や E、及び C から D や E への好ましい転移を促す方法を提案することを目指した。具体的な検討課題は以下の二つである。

上海日本人学校の高校生が中国語 (第二言語) 及び英語 (外国語) に対して持つ学習ピリーフ、学習ストラテジーの変化を量的、質的な観点から縦断的に調査する。

日々中国語に接することにより形成されると予想される好ましい学習ピリーフ、学習ストラテジーを英語学習に転移させる介入法を提案する。

### 3. 研究の方法

上海日本人学校高等部の生徒にとって、中国語は第二言語、英語は外国語である。

の目的のため、彼らが中国語と英語に対して持つ学習ピリーフ、及び中国語と英語に対して使用する学習ストラテジーを比較し、英語に対する学習ストラテジーの使用に影響を与える要因を検討した。質問紙調査を行い、中国での滞在月数に加え、学習ピリーフの3因子、「コミュニケーションな現代志向」「伝統志向」「外国語学習の適性と難しさ」と、学習ストラテジーの5因子、「記憶・認知」「補償」「メタ認知」「情意」「社会」に関して、それぞれ英語と中国語に対して尋ね、5件法によって測定した。また、日本に帰国した卒業生に対して半構造化面接により追跡調査を行った。

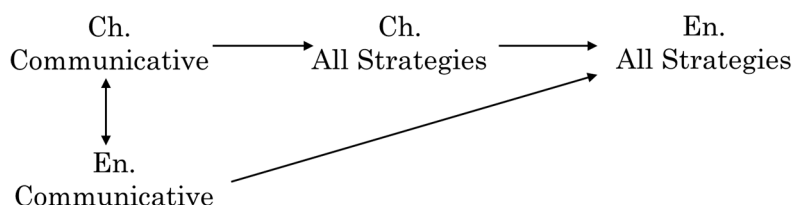
に関連し、大学における授業で、チーム基盤型学習 (Team-Based Learning: TBL) を取り入れた

指導を複数回試行し改良を重ねた (関谷, 2017, 2018, 2019a, 2019b, 2020)。本研究の対象者は上海日本人学校の高校生であるが、指導の試行をそこで複数回行うことは困難であるため、大学での取り組みをもとに提案を行うためである。具体的には、大学の英語教育学専門科目の授業において専門知識の理解促進を目的とした TBL を取り入れて改良を加えた。そこで得られた方法論に関する知見を、本来の目的である、経験のから自分の信念 (学習ビリーフ) に気づき、そこから意味を見つけて行動 (学習ストラテジー) に結びつけるための方法提案につなげることを目指した。

#### 4. 研究成果

に関して多変量分散分析の結果、学習ビリーフにおいては「コミュニケーションな現代志向の英語学習」が、学習ストラテジーにおいては5つのすべての因子において得点は英語のほうが高かった。また、中国での滞在期間によって結果の傾向は変わらなかった。続いて、2つの重回帰分析の結果、英語の学習ストラテジーの使用は、英語に対する「コミュニケーションな現代志向」が直接影響を与えるほか、中国語に対する「コミュニケーションな現代志向」が中国語の学習ストラテジーを媒介して影響を与えることが明らかになった (図2)。このことから、日本語を母語とする高校生が中国語を第二言語環境の中で使用・学習することによって形成される学習ビリーフが、中国語に対する学習ストラテジーの使用を通して英語に対する学習ストラテジーの使用に転移することが示唆された。

図2. 媒介モデル



注. “Ch. Communicative”は中国語に対するコミュニケーションな現代志向, “En. Communicative”は英語に対するコミュニケーションな現代志向, “Ch. All Strategies”は中国語に対するすべての学習ストラテジー使用, “En. All Strategies”は英語に対するすべての学習ストラテジー使用を示す。

日本に帰国した卒業生に対する半構造化面接の分析の結果、日本から中国に渡航した直後は戸惑いながらも生活での必要性に迫られ中国語を使用し、コミュニケーションの成功体験から英語学習・使用にも学習ビリーフが転移するさまが示された。加えて、統語的、形態的な形式面よりも、必要な語彙を習得することの重要性を再認識するようになったことがうかがえた。

に関して、の研究目的で行った上述の半構造化面接を経験すること自体が調査協力者にとって効果的な介入となる可能性が示された。この点と、前年度に提案したチーム基盤型学習形式の指導を融合させ、グループで各メンバーが経験や考えを共有することが、第二言語学習で身に着けた学習ビリーフや学習ストラテジーを外国語学習に転移させる一つの効果的な介入法であることを提案した。

#### < 引用文献 >

- Brown, H. D. (2007). *Principles of Language Learning and Teaching, 5th edition*. White Plains, NY: Pearson Education Inc.
- Kamalizad, J., & Kalilzadeh, K. J. (2016). Language learning strategy preferences of Asian EFL learners. *English Language Teaching*, 3(1), 31-47.
- Adel, S. M. R., (2015). The comparison between upper-Intermediate EFL and ESL learners' beliefs about language learning strategies. *International Journal of Education and Research*, 3(8), 237-248.
- 関谷弘毅. (2013). 「在外日本人学校の高校生の持つ特異性の検討と新たな教育活動の提案 - 学習ビリーフ, 学習動機, 学習ストラテジーに着目して - 」, *STEP BULLETIN*, 25, 278-287.
- 関谷弘毅. (2017). 「チーム基盤型学習 (TBL) が概念理解と学習意欲に与える影響 - 英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から - 」, 『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』, 14, 87-105.
- 関谷弘毅. (2018). 「チーム基盤型学習 (TBL) において概念理解と学習意欲が形成されるプロセスの検討 - 英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から - 」. 『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』, 15, 93-110.
- 関谷弘毅. (2019a). 「大学の英語教育学専門科目におけるチーム基盤型学習 (TBL) の導入とその改善 - グループワークにおける役割付与の効果 - 」, 『全国英語教育学会紀要』, 30, 319-334.
- 関谷弘毅. (2019b). 「チーム基盤型学習 (TBL) が知識獲得と概念理解に与える影響 - 英語学の授業実践から - 」, 『中国地区英語教育学会研究紀要』, 49, 43-53.
- 関谷弘毅. (2020). 「チーム基盤型学習 (TBL) における役割付与が英語学の専門知識習得に与える影響」, 『中国地区英語教育学会誌』, 50, 65-77.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 SEKITANI Koki	4. 巻 21
2. 論文標題 Learners' Beliefs and Learning Strategies Regarding Chinese as a Second Language and English as a Foreign Language at Shanghai Japanese High School	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian English Studies	6. 最初と最後の頁 52-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関谷 弘毅	4. 巻 30
2. 論文標題 大学の英語教育学専門科目におけるチーム基盤型学習（TBL）の導入とその改善 - グループワークにおける役割付与の効果 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 319～334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.20581/arele.30.0_319">https://doi.org/10.20581/arele.30.0_319</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 SEKITANI Koki	4. 巻 5
2. 論文標題 Comparing the Beliefs and Motivations of Japanese High School Students for English Learning in China and Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島女学院大学国際教養学部紀要	6. 最初と最後の頁 92-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 関谷 弘毅	4. 巻 15
2. 論文標題 チーム基盤型学習（TBL）において概念理解と学習意欲が形成されるプロセスの検討 - 英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学英語教育学会中国・四国支部紀要	6. 最初と最後の頁 93-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 SEKITANI Koki
2. 発表標題 Learners' Beliefs and Learning Strategies for Second and Foreign Languages at Shanghai Japanese High School
3. 学会等名 日本「アジア英語」学会第43回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関谷 弘毅
2. 発表標題 チーム基盤型学習（TBL）における役割付与が概念理解と学習意欲に与える影響 - 英語教育学専門科目の授業実践から -
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関谷 弘毅
2. 発表標題 チーム基盤型学習（TBL）において概念理解に影響を与える要因の質的検討
3. 学会等名 平成29年度JACET中国・四国支部秋季研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----